
少女の杯

廃人亭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女の杯

【Nコード】

N1937N

【作者名】

廃人亭

【あらすじ】

名家の令嬢が集うパーティーにはじめて参加したとある令嬢の
悲しみ

私は悲しんだ。

私の手前にある杯はひどく歪な形をしている。周囲を見渡すと、そこには様々な杯がある。花びらを思わせるようなかわいいダイヤカットが施されたグラス、上品でかわいいルビー色の被せグラス、ワンポイントのかわいい、あれは魔法使いだろうか？ 箒に乗った女性のレリーフが施されただけの、ちょっと無骨なタンブラーがあった。どのグラスも、彼女たちらしい個性が表れていた。そのことが、私をいつそう悲しませた。

「そうね、次のパーティーの時には、各々杯を持ち寄ることにしましょう」

話の発端は、この前あったパーティーの最中に、誰の美的センスが優れているかという話題が出たことにあった。結局結論が出ず、それならば次の機会に、美的センスを試してみようと年長者の女性が提案したのだった。

このような提案が、この少女のはじめて参加するパーティーが開催される時と重なってなされたことは不幸な話である。しかもこの提案が姉の競争心を刺激し、この館の者は己の手で杯を作り、真に美を知るものであることを証明すべしと思いついたことはいっそう不幸な話である。何ら芸術に造詣を持たぬこの少女が、美に適う杯を作ることが出来るわけもなく、また元来の不器用さも災いして、彼女のグラスはひどい歪な形をした、何の装飾もないものとなった。

少女はどこかに自分と同じ境遇の者がいないかと思い、あたりを見回した。するとそこに、竹を切っただけの器があることに気がついた。彼女はそれが、きつと都合の良い杯を準備できなかった者が

苦肉の策で用意したものに違いないと思った。そして、竹杯の持ち主を見てみたいと思った。その持ち主を見て、少女は驚いた。その持ち主は、この提案を行った年長者の女性だった。少女がしばらく呆けているうちに、年長者の女性と目が合った。女性は豊かに微笑んだ。少女は恥ずかしくなって俯いてしまった。そうして俯いているうちに、誰かが年長者と話をする声が聞こえた。

「流石に、わびさびを知っているわね」

「竹杯なんて、相変わらず年寄りくさいわね」

「自然の美ということですね」

「趣があつていいですわ」

年長者とそれを取り囲む女性たちから楽しそうな会話が聞こえてくるたび、私は悲しみを深めていった。そして恥ずかしくなった。自分の審美眼のなさが、不器用さが、引っ込み思案が。そして自分の容貌が、境遇が……何一つとして自分には誇れるところがないように思えるのだった。

「それでは、咲夜。そろそろ乾杯の用意を」

姉の言葉に従い、咲夜とメイドは、皆にワインを注ぎ始めた。中には持参した杯がワインを飲むのに適さないも者もいたが、その者にはメイドが別のグラスを用意するか、あるいはその杯に合う酒を用意した。皆の杯が満たされたとき、レミリアは皆の前に立ち、パーティーの主催者として挨拶を始めた。

私は、堂々と挨拶を行う姉を見て、いつそう悲しい気分になった。その杯の美麗なのを見て、なおのこと落胆を深めた。もうどうしたって、私は私を肯定することが出来なかった。

そのとき私は、姉が私を呼ぶ声が聞こえた。咲夜が、私の後ろに

回り、私を促して前に行かせた。私にとって、その一つ一つがたまらなく苦痛であった。私は、もうすっかり部屋に戻って、泣いてしまいたい心地であった。姉が私を皆に紹介しているらしいが、何を言っているのかは、もう私には聞こえなかった。

紹介が終わり、いよいよ私と姉の杯にワインが注がれる時となった。私は、私の醜いグラスにワインが注がれていく様を見ることを耐え難く思った。そしていよいよ、姉のワインに杯が注がれるときが来た。私は、到底その様を見る気にはなれなかった。そのときである。

ピキツと言う、何かガラスの様なものが欠ける音がした。

私は思わず音のした方を見て驚いた。あの金細工が見事な姉の杯から、ワインがこぼれ落ちているのである。そのワインは彼女の手を汚し、袖を汚し、床を汚し、パーティーの主催者としての面子すら汚しているようだった。

パーティーの参加者がどよめきだつ。咲夜もまた、あわてた様子だった。しかし姉は、泰然として動じなかった。

「私の杯はこんなに欠けておりますが、この杯は私の杯でありますから、私はこの杯でワインを頂きます」

そしてレミリアは片手をグラスの欠けた部分に当てて言った。

「乾杯!!!」

その様を見て、一同は杯を傾ける。パーティーの始まりである。

「さあ、貴方も乾杯を」

姉は満面の笑みを携えて妹に語りかけた。

「はい、お姉さま」

こうして私はすっかり救われた。姉の面子は、決して失われなかった。

（後書き）

森鷗外の杯は読んだことがありません。しかし非常に有名な一文は知っています。それを知ったのは、作品を作り終わった後でした。もしかしたら、内容も近いものがあるんじゃないか？それならば光栄です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1937n/>

少女の杯

2010年10月10日21時34分発行